月づき　弄ちゃ　玩ぐ

クリスマス

どうやって日本に定着したか

クラウス・クラハト
克美・タテノクラハト

Merry Christmas

日本における、はじめてのクリスマス通史

**戦国時代から現代に至るまで、人びとに歓迎され続ける
クリスマスの魅力を歴史的に探ったユニークな文化史**

9784048835985

1920039018007

ISBN4-04-883598-X

C0039 ¥1800E

定価：本体1800円（税別）

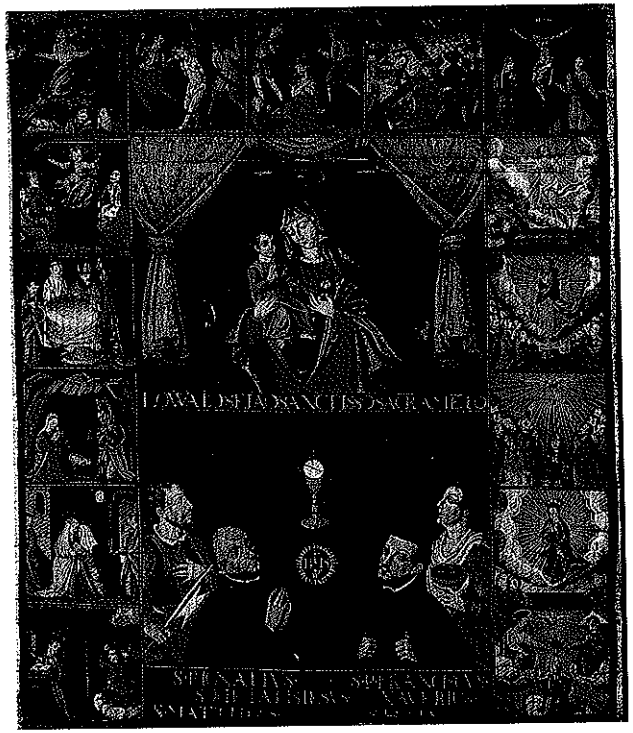
ドイツという「キリスト教国」から来た人間にとって、日本で見聞したクリスマスに関するすべては、新鮮な驚きと「なぜ？」の連続であった。日本のクリスマスは想像以上に盛んで、華やかで、自由で、エキサイティングで、なによりも多様性に富んでいた。私たちはとりわけキリスト教徒ではない一般の日本人によるクリスマスを対象に研究をはじめることにした。……私たちの立場は文化人類学などのそれではなく、文化史である。……クリスマスに関係する歴史事実はすべて日本文化史の証言であるとみなした。――――――〈「はじめに」より〉

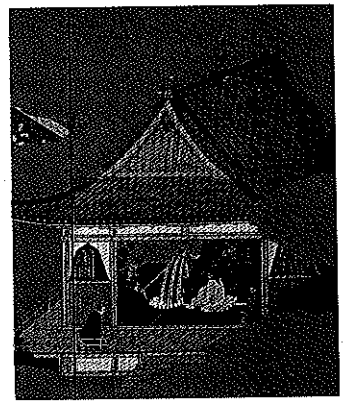
クリスマス

どうやって日本に定着したか

クラウス・クラハト
克美・タテノクラハト

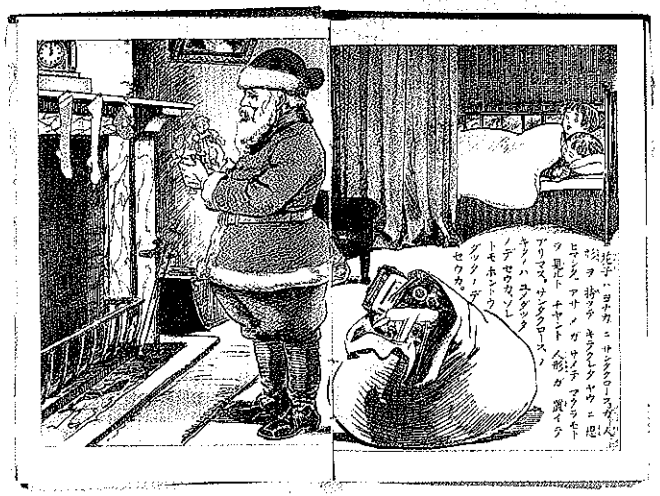
角川書店





上　マリア十五玄義図［京都大学総合博物館蔵］原図をもとに日本のキリシタン画家が17世紀前期に制作。中央上段に聖母子像、下段に左からマタイ、ロヨラ、ザビエル、ルキアを描き、これらをとりまくように左下から右下にかけてマリアの生涯を歓び・悲しみ・栄光の各5場面に分けて図解している。

左　南蛮屏風　狩野内膳筆［神戸市立博物館蔵］南蛮寺でのミサの様子。



上　花子が見たサンタ『子供之友』大正３年12月号

下　プレゼントの用意をするサンタと仲間たち『子供之友』大正７年12月号

上右　夕波山人著・鈴木暁湖画『家庭お伽噺・クリスマスの贈物』大正２年

上左　サンタとキュウピー『子供之友』大正５年12月号

右　ラジオ番組表「子供のテキスト　十二月放送」昭和８年

クリスマス——どうやって日本に定着したか

左　クリスマス　松本かつぢ画『少女世界』昭和6年　人気挿絵画家が描いた少女姿のサンタ

下　大正から昭和初期の日本製クリスマス・グッズ［大川真理子コレクション］外国向けに輸出されていた。

目次

はじめに――1
一　クリスマスとは　2
二　クリスマスについての研究　6
三　私たちの出発点と方法　8

第一章　ナタラの時代――15
一　最初のクリスマス　15
二　戦国末期からキリスト教禁教令へ　24
三　隠れキリシタンの霜月祭り　31
四　阿蘭陀冬至　33
コラム「ボアーズヘッド」（猪頭）の由来　38

第二章　幕末・明治――41
一　開国せまる「文明の宗教」　41
二　「美しいクリスマスの朝」　47
三　お雇い外国人が伝えたもの　52
四　ハイソサエティーの行事　61

第三章　日清戦争から日露戦争へ――78
一　キリスト教とクリスマスの行方　78
二　クリスマス商戦　84
三　国際化とジャポニズム　95

第四章　大正・昭和初期――107
一　近代芸術にみるクリスマス　107
二　日本のドイツ人捕虜　121
三　クリスマスの大衆化　125
四　第二次世界大戦前夜　141

第五章　戦時下――148
一　日中戦争から第二次世界大戦へ　148
二　クリスマスプレゼントを配った日本軍　155

三　戦禍のクリスマス事情　158

第六章　戦後から高度成長期へ——167

一　デモクラシーの祭り　167

コラム・一九四五年のクリスマス　170

二　資本主義の味　187

三　ホーム・クリスマスの奨め　192

四　「ノン」の表明　201

五　クリスマスの日本土着化　205

終章　クリスマスの魅力——212

一　クリスマス化した伝統　213

二　クリスマスの愛と新しいライフ・スタイル　218

三　クリスマスの可能性（ファンタジー）　224

謝辞　230

〈写真協力・提供〉朝日新聞社大阪本社・東京本社　大分市　大川真理子　大阪府立国際児童文学館　大宮市立漫画会館　カトリック鹿児島司教区本部　株式会社明治屋本社　共同通信社　京都外国語大学付属図書館　京都大学総合博物館　京都大学人文科学研究所　熊谷元一　神戸市立博物館　出版美術文化振興財団・昭和ロマン館　堤鳴木　帝国ホテル　中瀬喜陽　西宮市　日本通運㈱　梅花学園　林重男　原恵　フェリス女学院　松本富士男　山口梅太郎（敬称略）

本書掲載の写真・資料の著作権などに関しましては、できるかぎり注意を払っておりますが、不明なものもあります。お気づきの点がありましたら、小社宛にご連絡願います。

装丁／松岡史恵

はじめに

「クリスマスですか」とある学者が笑った。

書架に並ぶ『南方熊楠全集』『定本柳田国男全集』『折口信夫全集』『日本民俗文化大系』などの方に視線を向けながら「外国人がせっかくやるなら貴重な日本古来の年中行事を研究したらいいのに……。日本のクリスマス？　あれは西洋のクリスマスとはぜんぜん違う宗教ぬきのお遊びですよ」その顔はそう物語っていた。

なるほど、それらの書籍にはクリスマスの項目は見当たらないし、「クリスマス」という言葉さえも数回しか現われない。日本では民俗学にかかわらず、クリスマスを社会現象のひとつとして、学問の領域ではめったに取り扱われていないのが現状である。

クリスマスはザビエルとともに伝来してから四五〇年の歴史をもつだけでなく、遅くとも明治後期、日露戦争と第一次世界大戦の間にはクリスチャンの範囲を超えてすでに日本文化となっていた。今村敬天の明治三四（一九〇一）年の『短笛長鞭』という詩集のなかには「姉様（チャン）、坊は男児（をとこ）だよ。羽子をつかず（チュ）にホラ凧を、ウーウー坊は凧揚げる。嬉しかつたよクリスマス（チュ）」という節が見られ、

サンタクロースからクリスマスプレゼントとして正月用の羽子板や凧をもらった幼な児のよろこぶ様子が描かれている。

どのようにしてクリスマスが日本で人気のある年中行事となったのか。なぜクリスマスがこれほど好まれ受容されたのか。まず、私たちはそれが知りたかった。

一　クリスマスとは

クリスマスとは、文字どおりキリストのミサの意で、キリストの誕生を祝う降誕祭であるが、紀元元年一二月二五日にイエス・キリストが生まれたという確証はない。それにしても現在、クリスマスは世俗化された形で「グローバルな祭り」となり、世界で一番好まれ、一番重視され、人類共通といえるほどの年中行事になった観さえある。約二〇〇ある世界の国ぐにのうち約一五〇カ国がクリスマスを国家祝祭日に規定し、しかもその一五〇カ国のなかにはキリスト教国ではない国々も含まれる。

アメリカの場合

アメリカ合衆国は世界各国のクリスマスにもっとも大きな影響を及ぼしたといわれるが、しかし新島襄（にいじまじょう）が日本を脱出してアメリカで初めてクリスマスを祝った一八六六年、このときにはアメリカ

ではまだ全部の州でクリスマスを祝日とは認めていなかった。厳格な清教徒はイギリスと同様クリスマスを祝うことも拒否してその日も働き、お祭り的なクリスマスに反発する雰囲気がなお根強かったからである。[注一]

最初にクリスマスデーを祝祭日として認めたのはアラバマ州である（一八三六年）。その三〇年後、すなわち南北戦争が終わった頃その数は二九州となり、一八九〇年ついに全土で認定されるに至る。宗教界で指導的な人物として活躍したヘンリー・ヴォード・ビーチャは一八七四年「私にとってクリスマスとは別世界のような日」と嘆き、また『クリスチャン・アドヴォケート』という日刊誌は、「クリスマスとは一年のなかでもっとも罪と冒瀆（ぼうとく）、そして異教徒の愚かさがきわだつ日」（一八八六年）とまで叩（たた）いている。しかしこうした憤怒の声はしだいに弱まり、クリスマスはやがてアメリカにおける各キリスト教宗派間の掛け橋（ecumenical bridge）となって、[注二]さらには「国民文化」（national culture）の基礎のひとつとして確立した。[注三]

「クリスマス・カルト」（Christmas cult）という言葉がある。それはすべての宗教的・準宗教的・世俗的なクリスマス活動、すなわちその文化的なレパートリーをさす。アメリカのクリスマス研究家J・バーネットによれば、クリスマス・カルトを支持するためにはただひとつの前提がある。すなわちクリスマスの「表象」（external forms）を認めることである（クリスマス・ツリー、パーティー、慈善など）。信仰の必要はないが、しかしその表象・ライフスタイルには言うまでもなくクリスマス的な価値観が内在する。その価値とは、アメリカンドリーム、家族愛・子供への愛、慈善（キャロ

ル哲学)、人類愛などである。したがって誰もがクリスマス・カルトに参加でき、多民族・多宗教国家であるアメリカの共通のカルトになることができた、[注五]という説明になる。

これと同様の条件で日本にもクリスマスが定着できたのではないか、と私たちは考えた。なぜなら明治初期の日本に受容されたクリスマスは、すでにかなり高い程度まで世俗化されたクリスマス・カルトだったからである。

日本の場合

日本はクリスマスを国家祝祭日としない少数派に属する国のひとつである。それは昭和二二(一九四七)年に施行された「日本国憲法」による政教分離の原理に基づく。よって、戦後の日本は国家祝祭日のすべてが非宗教的なものにかぎられている。しかしそれにしても日本は事実上「クリスマス・カルト」のメンバーといえる国である。

クリスマスというカタカナ語は、パンという言葉と同じ程度に普及された日本語であり、クリスマスを表わす書き方、言い方も耶蘇祭(イエスまつり)、聖誕祭、基督万寿(クリスマス)、久里寿満寿(クリスマス)、X'マス、X'mas、くりすます等々、古い時代のものも合わせると三〇以上を数え、おそらく世界一多いのではないかと思われる。

「クリスマス」という単語とドッキングした言葉も、もっともポピュラーなメリークリスマス、クリスマスツリー、クリスマスケーキなどから、カラオケクリスマス、クリスマスナイト、クリスマスファンタジー、クリスマス献血、クリスマスエステ、アウトドアクリスマス、ディズニークリスマス、ラブクリスマス、ラストクリスマス……クルシミマスまで、目にしたものだけでも三〇〇以上にのぼる。

サントリー不易流行研究所が日本全国各地の職業・家族構成の異なる家庭を対象としたアンケート調査『現代家庭の年中行事　三六六家族からの報告』で年中行事の実施率を多面的な角度から分析した。それによれば、一九九〇年代初頭、最も高い実施率を示したのは正月(九二・八%)で、二番目がクリスマス(七九%)、三番目は節分(六一・五%)、四番目がお盆(六〇・三%)であった。クリスマスをさらに詳しくみると、子供のいない二〇、三〇代の夫婦では七四・五%、就学前の子供のいる家庭では八五・七%、小学生がいる家庭は八七・二%、そして子供が独立したか、いない四〇代以上の場合でも五三・六%という比率を示した。

クリスマスが圧倒的に支持されていることは、欧米から移入された他の年中行事、例えば母の日(四一・五%)、ヴァレンタインデー(三七・六%)、父の日(三二・一%)、ホワイトデー(七・三%)そしてハロウィン(一・三%)などと比較しても一目瞭然(いちもくりょうぜん)であろう。他の機関による調査結果でもクリスマスは非常に高い実施率を示している。[注六]

いったいどうして日本でクリスマスがそんなに支持されるのであろうか。

二　クリスマスについての研究

欧米における年中行事の研究は、いうまでもなくクリスマスに集中してきた。多くの場合、クリスマスの徹底的な分析によってそれぞれの文化の領域が明解になるからである（神話、習俗、社交など）。とくに人文科学・社会科学の理論家がクリスマスに興味を示すのは当然なことであろう。比較神学のジェイムス・フレイザーの『金枝篇』や民族学のクロード・レヴィ＝ストロースの『火あぶりにされたサンタクロース』や人間の動物行動学者であるデズモンド・モリスの『クリスマス・ウォッチング』などはその好例である。[注七]

欧米について

一九世紀後半の欧米クリスマス隆盛に伴い、一八六〇年代からクリスマスについての歴史学や歴史民俗学研究が盛んになった。[注八] 第一次世界大戦後のドイツのクリスマス研究はゲルマン民族の偉大性を証明しようとした民族主義・人種主義のもとに行われ、その結果、キリスト教的なクリスマスのかわりにゲルマン民族の原始宗教としての冬至祭が強調された。[注九] その流れを汲むといわれる研究はまだ存続する。[注一〇]

一九三〇年代アメリカに始まったクリスマスに関する心理学研究は、戦後その発展をみる。グリ

スマスの理想（家族愛、キャロル哲学など）と現実とのギャップから生じる「クリスマスノイローゼ」「ブルークリスマス」「クリスマス恐怖」などが分析された。[注一一] さらに社会学、政治学なども加わるが、研究の焦点は家族、消費主義、プレゼント、差別問題、政教分離などである。[注一二]

今までの世界各国の関心はアメリカ、イギリス、ドイツやフランスのクリスマスに集中してきたが、それには認識の限界がある。[注一三] 一九七〇年代から西洋の膨大な研究資料の一部が日本でも紹介されるようになり、[注一四] その他、欧米のクリスマスを伝える童話、伝説集、紀行、歌集、演劇集、説教集、絵画集、写真集なども増加した。[注一五] しかし他方で、日本人による西洋のクリスマスについての独自な学術的研究はあまりなされていない。[注一六]

日本について

欧米で日本のクリスマスが研究されはじめたのは一九六〇年代からで、テーマとしては近代化・国際化、消費主義、シンデレラクリスマスなどが挙げられる。[注一七] 日本の研究者が日本のクリスマスを取り上げたのは一九七〇年代になってからで、しかもごくわずかにかぎられる。[注一八]

日本ではキリスト教徒は別として日本のクリスマスを非宗教的なイベントとみなしている。次に紹介する例のように、クリスマスに対する大方の意見は「戦後アメリカから移入された、キリスト抜きの商業主義」というものであろう。

日本人はお祭り好きであることから、クリスチャンが国民の一％に過ぎないにもかかわらず、

非宗教的な祭日としてクリスマスは広く行われている。それは一九五五年の一二月二四日から始まった。その日はじめて、日本政府は公式的に第二次世界大戦で引き起こされた食糧難を解決したと宣言した。そのニュースを聞いた五二万から一〇〇万の民衆が東京のメインストリート、銀座に集まった。以降、銀座で毎年クリスマスを祝うことが日本の伝統になった。日本の百貨店はクリスマスを浸透させようと大いに宣伝し、プレゼントを贈る習慣は、サンタクロースと同様、だんだんポピュラーになっていった。[注九]

日本の読者の方々は、この見解を読んでどのような印象をもたれるであろうか？　私たちは、いくつかの誤解を指摘できる。どこが誤りなのか、本書ではこうした誤解を解くとともに、日本におけるクリスマスの動向が、もっと複雑で多様であることを明らかにしたい。

三　私たちの出発点と方法

それは一九八八年、客員として籍をおいていた東京大学社会科学研究所のクリスマス・パーティーでのことだった。シャンパングラスが並んだ所長室のテーブルを囲んで、みんなはキャンドルを手にクリスマス・キャロルを歌った。その数日後、学長も国際宿舎でクリスマス・パーティーを主催した。そのときは、なぜ東大がクリスマス・パーティーを組織するのか、理由がわからなかった。

私たちが日本のクリスマスについて学術的な興味をもつようになったのは、一九九三年八月より

翌年の春まで京都大学人文科学研究所の客員として日本の年中行事に関する研究にたずさわったときからである。私たち夫婦は連日、クリスマス・シーズンの街へ出かけ、イブには教会の降誕祭に出席し、クリスマス・ディナーでは七面鳥料理も初体験した。クリスマス関係資料収集に奔走したのである。ドイツという「キリスト教国」から来た人間にとって、日本で見聞したクリスマスに関するすべては新鮮な驚きと「なぜ」の連続であった。日本のクリスマスは想像以上に盛んで、華やかで、自由で、エキサイティングで、なによりも多様性に富んでいた。私たちはとりわけキリスト教徒ではない一般の日本人によるクリスマスを対象に研究をはじめることにした。しかし「一般の人」といっても、文化人類学などの概念ではない。現代ドイツの民俗学者ヘルマン・バウジンガーは自分の科目を冗談で「古着屋学」(Lumpensammler-Wissenschaft) として定義する。[注一〇] が、私たちの立場は文化人類学などのそれではなく、文化史である。そのためエリートの文化（大使の日記、哲学者の論文など）といわゆる「一般の人」の「庶民文化」（子供の話など）の相違を超えて、クリスマスに関係ある歴史事実はすべて日本文化史の証言とみなした。

まず手はじめとして、新聞、主に朝日新聞の創刊（明治一二年）から現在に至るまでをしらみつぶしに調査した。さらに、宣教師からお雇い外国人、外交官、政治家、芸術家、学者、教育家、軍人、農民、会社員、主婦、学生、ホステスに至る有名、無名の幅広いジャンルの人物による日記や手紙、そして、文学作品、児童書、または、雑誌や写真集、漫画、映画、テレビ番組、コマーシャル、パンフレット、インターネットなども調査の対象となった。

よく「日本のクリスマスの特色はなんですか」と聞かれる。その質問に学術的方法で答えることはまだ早いであろう。半世紀前に、バーネットは「クリスマス」という現象を説明する学説はまだ存在しないと述べた。それぞれの時代・文化・社会・階級・年齢層などによるクリスマスを徹底的に理解するためには比較研究に基づくクリスマス理論が必要である。バーネットの発言以来五〇年たった今なおクリスマス研究は欧米に集中し、クリスマス理論の確立への見通しは立っていない。

欧米のクリスマス史研究を行う者は、一九世紀から集められた膨大な知識を駆使することができる。私たちはそれらの研究から多くのヒントを受けたが、日本のクリスマス史に関して信頼できる研究はわずかなため、この研究はゼロから出発するほかなかった。

私たちの研究は、まだ未踏の世界に一歩足を踏み入れたにすぎない。その一歩とは、日本史のなかに展開されたクリスマスの事実を明らかにすることであった。資料収集は今後も続ける予定であるが、今、仕事が一段落したところでまとめたのが本書である。本書はこれまでに集めた数々のクリスマスにまつわるエピソードや写真、絵などの一部を歴史に沿って紹介するものである。この四五〇年におよぶクリスマス風景史を辿る私たちの旅は、思いがけずさまざまな人間模様に触れるきっかけともなり、日本文化の新しい側面を観照する旅となった。東大のあのクリスマス・パーティーの理由も少しは理解できたように思う。

〔注〕

一 『明治文学全集六一　明治詩人集（二）』筑摩書房　一九七五年　三二頁

二 Stephen Nissenbaum: *The Battle for Christmas. A Cultural History of America's Most Cherished Holiday,* New York: Vintage Books, A Division of Random House,Inc., 1997

三 Albert J. Menendez: *The December Wars. Religious Symbols and Ceremonies in the Public Square,* Buffalo, New York: Prometheus Books, 1993, p.56-60

四 James H. Barnett: *The American Christmas. A Study in National Culture,* New York: The Macmillan Company, 1954

五 右同書 p.130

六 サントリー株式会社不易流行研究所＋CDI『現代家庭の年中行事　三六六家族からの報告』サントリー株式会社不易流行研究所　一九九二年　二二九～二四九頁

七 Sir James George Frazer: *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion,* 13 vols., London, 1890 フレイザー著　永橋卓介訳『金枝篇』改版　岩波書店　一九六六～六七年
Claude Lévi-Strauss: "Le Père Noël supplicié", *Les Temps modernes* 7 (1932), 1572-90. クロード・レヴィ＝ストロース著　中沢新一訳著『サンタクロースの秘密』せりか書房　一九九五年　Desmond Morris: *Christmas Watching,* London: Cape, 1992　デズモンド・モリス著　屋代通子訳『クリスマス・ウォッチング』扶桑社　一九九四年

八 William Sandys: *Christmas-tide. Its History, Festivals, and Carols,* London, 1860 Paulus Cassel: *Weihnachten, Ursprunge, Brauche und Aberglauben,* Berlin, 1862 Johannes Marbach: *Die heilige Weihnachtszeit,* Frankfurt, 1865 William Dawson: *Christmas. Its Origins and Associations,* London, 1902

Clement Miles: *Christmas in Ritual and Tradition, Christian and Pagan,* London, Leipzig, 1912

九　*Politische Weihanacht in Antike und Moderne. Zur ideologischen Durchdringung des Fests der Feste.* Herausgegeben von Richard Faber und Esther Gajek, Würzburg: Königshausen & Neumann, 1997 Doris Foitzik: *Rote Sterne, braune Runen. Politische Weihnachten zwischen 1870 und 1970,* Münster, New York, München, Berlin: Waxmann, 1997

一〇　Alain de Benoist: *Fêter Noël. Légendes et traditions,* Puiseaux: Editions Pardês, 1982

一一　Rochelle Semmel Albin: *Christmas Blues. Reality or Myth,* Ph. D. thesis, The George Washington University, 1982　Carl John Anderson: *On Discovering the Truth. Children's Reactions to the Reality of the Santa Claus Myth,* Ph. D. thesis, The University of Texas at Austin, 1987　Mark P. Thomas: *Christmas Dread. An Ethnographic Study,* Ph. D. thesis, Princeton Theological Seminary, 1997

一二　Daniel Miller (ed.): *Unwrapping Christmas,* Oxford: Clarendon Press 1993 William B. Waits: *The Modern Christmas in America. A Cultural History of Gift Giving,* New York, London: New York University Press, 1993 Stephen M. Feldman: *Please Don't Wish Me a Merry Christmas. A Critical History of the Separation of Church and State,* New York, London: New York University Press, 1997 (Critical America)

一三　Leona Rasmussen Phillips: *Christmas. An Annotated Bibliography,* New York: Gordon Press, 1978 Sue Samuelson: *Christmas. An Annotated Bibliography,* New York, London: Garland Publishing, Inc., 1982

一四　例　今橋朗・船本豫・松本富士男著『クリスマスの招き　聖書伝承・歴史・美術』燦葉出版　一九七七年、カトリーヌ・ルバニョール著　今井裕美子・加藤行男訳『サンタクロースとクリスマス』東京書籍

一九八三年、遠藤紀勝・大塚光子共著『クリスマス小事典』社会思想社　一九八九年、塩野米松文・構成　中川祐二写真『サンタクロース物語』求龍堂　一九九〇年、コレット・メシャン著　梶口淳・諸岡保江編訳『サンタクロース伝説の誕生』原書房　一九九一年、『Santa Claus サンタクロースとその仲間たち』フェリシモクリスマス文化研究所編著　大阪　フェリシモ　一九九二年、O・クルマン著　土岐健治・湯川郁子訳『クリスマスの起源』教文館　一九九六年、萩原雄一著『サンタクロース学入門　ひもとけば、愛！』高文堂出版社　一九九七年

一五　最近の例　谷中央、長橋由理文・写真『ドイツ・クリスマスの旅』東京書籍　一九九五年、R・ランダウ編　加藤常昭訳『光の降誕祭　20世紀クリスマス名説教集』教文館　一九九五年、小椋和子・ロルフ・クライン楽譜『ドイツのクリスマスの歌』鎌倉　森企画　一九九六年、ジェームズ・フィン・ガーナー編著　デーブ・スペクター訳『政治的に正しいクリスマス物語』ディーエイチシー　一九九六年、渡辺茂男訳　丸木俊子画『こまどりのクリスマス　スコットランド民話』福音館書店　一九九六年、シメリョフ［ほか］著　田辺佐保子訳『ロシアのクリスマス物語』群像社　一九九七年、ディラン・トマス文　エドワード・アーディゾーニ絵・村岡美枝訳『ウェールズのクリスマスの想いで』瑞雲舎　一九九七年、小椋和子・ロルフ・クライン編著・訳『イギリスのクリスマスの歌』鎌倉　森企画　一九九八年

一六　上田重雄著『ヨーロパの神と祭　光と闇の習俗』早稲田大学出版部　一九九五年、土屋仁著『クリスマス文書』文芸書房　一九九六年

一七　David W[illiam] Plath: "Overworked Japan and the Holiday Demiurge", *Today's Japan* 5(1960), p. 61-4　同　*The Strung and the Unstrung. Holidays in Japanese Life,* Ph. D. thesis, Harvard University, 1962　同　"The Japanese Popular Christmas. Coping with Modernity", *Journal of American Folclore* 76 (1963), p. 309-17 Joy Hendry: "St. Valentine and St. Nicholas Travel Abroad: Success and

Internationalization in Japanese Education", *Japan Forum* 3.2 (1991), 313-23 Vadim Yegorov: "Japan. Christmas Japanese Style", *Asia and Africa Today* 6 (1991), 79-81 Brian Moeran, Lise Skov: "Cinderella Christmas: kitsch, consumerism, and youth in Japan", *Unwrapping Christmas* 注一二前掲書 p. 105-33

一八　片山五郎著『世界のサンタクロース』社会教育協会　一九七一年、注一四前掲書『クリスマスの招き』、井上忠司　サントリー不易流行研究所『現代家庭の年中行事』講談社　一九九三年（講談社現代新書）、石井研士著『都市の年中行事　変容する日本人の心性』春秋社　一九九四年、萩原雄一著『児童文学におけるサンタクロースの研究』高文堂出版社　一九九八年、葛野浩昭著『サンタクロースの大旅行』岩波書店　一九九八年

一九　Michael Stephenson: *The Christmas Almanac*, Oxford University Press 1992 3 版 p.111

二〇　Hermann Bausinger: *Von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse*, Berlin, Darmstadt: Carl Habel 1973

第一章　ナタラの時代

一　最初のクリスマス

今から約四五〇年前、つまり一六世紀後半から日本はポルトガルやスペインといった南ヨーロッパの国々との交渉がはじまり、貿易も活発に行われるようになった。したがって、日本にはじめてキリスト教をもたらした宣教師たちも、ローマ教会を頂点とするカトリック教徒であり、ポルトガルやスペイン、イタリアなどの南ヨーロッパ出身者たちであった。こうした宣教師たちが書き残した書簡などから、かろうじて当時のクリスマスの様子をうかがい知ることができる。

最初にキリスト教を日本にもたらしたフランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier 一五〇六～五二）が薩摩（鹿児島県）に着いたのは、天文一八（一五四九）年のことである。したがってその年、ザビエルによってクリスマスが薩摩で祝われたはずであるが、残念ながらその記録は見つかっていない。

ザビエルは、イエズス会のコスモ・デ・トルレス（Cosme de Torres）司祭（パードレ）とジョア